

九州伝産の旅

vol.2

2022年

上野焼 庚申窯

<窯元紹介>

1884年（明治十七年）に十時器八郎が作陶から手を引き、上野焼本筋の窯は途絶えてしまいます。

そこで1899年（明治三十二年）地元有志、熊谷九八郎、高鶴萬吉らが復興に着手します。田川郡からの補助金をたよりに細々と窯を築き、しばらく製陶に取り組みますが当時は陶作品の購入者は稀で、一度は窯小屋の火災に遭うなど苦労の時代でした。

こうした中、萬吉には子供ができず、ついには製陶から手を引き熊谷だけが残り、窯を存続させました。

1938年に入ると高鶴萬吉の弟の子鱗作が上野窯復興を思い立ち号を高鶴城山として高田焼（こうだやき）の上野（あがの）兄弟を呼び寄せて着手し、高鶴本窯を築き、翌年1939年から製陶を開始します。

1955年に高鶴本窯は長男の茂勝（号は高鶴夏山）に家督を譲ります。

1971年に城山の末子であった高鶴智山が39歳とのとくに庚申窯を築窯し、翌1972年から営業を始めます。作品の向上を図り、特別に薪専用の窯を建設し、昔日の作品に劣らないものを目指して日夜研鑽を重ねています。

あがのやき こうしんがま 上野焼 庚申窯

自然豊かな環境で普遍的なものづくりを目指す

福智町ののどかな風景の中、親子で作陶を行っている「庚申窯」さんにお邪魔しました。店内に入ると、色とりどりの作品が品良くディスプレイされた素敵な空間が広がっています。二代目の亨一さん、三代目の裕太さんにお話を伺いました。



亨一さんと裕太さん



落ち着いた店内



作陶の様子

■ 上野焼の歴史・特徴

1602年、豊前小倉藩主 細川忠興侯は、李朝の陶工・尊楷を招き、陶土、水質に恵まれた上野の地に窯を築きました。尊楷は細川忠興侯の指導により、格調高い茶陶を30年間、献上し続けました。徳川時代、上野焼は、遠州七窯のひとつとして、当時の茶人にとっても好まれました。その後、明治時代、上野焼は一時期途絶えてしまったかのように思われましたが、明治35年に田川郡の補助を受け再興されました。茶陶として発展した上野焼は、他の陶器類と比較して、極めて軽く、薄づくりであるという特徴を持っています。五感に心地良い、土の持つ素朴さ、力強さの中に「薄づくり」の上品さを秘めたその特徴は、現在にも受け継がれています。また、使う釉薬の種類が他に類を見ない程多いのも特徴のひとつです。

※上野焼協同組合 HP より引用・編集。

Q.「庚申窯」の商品の特徴は？

(享一さん) 親子三代で作風は見てのとおり全く違います。初代は従来の伝統的な上野焼の作品がメインで、香炉を作るのが好きでした。私は、伝統的なものと現代的なものを半々という感じで、特に大きい作品や“手びねり”を加えた作品が得意です。現代工芸に関しては、日本美術展覧会にも参加しています。息子は食器や植木鉢、オブジェなど、現代的な日用品をメインに作陶しています。



初代智山さんの作品



二代目享一さんの作品



三代目裕太さんの作品



Q.享一さんは上野焼協同組合の理事長もされていらっしゃいますが、上野焼産地全体としての取組を教えてください。

(享一さん) 毎年2月に「上野焼バレンタイン猪口（ちよこ）展」を開催しています。「チョコ」と「お猪口（ちよこ）」をかけてお猪口を販売するもので、前理事長が発案したイベントですが、予想以上に好評で、毎年恒例のイベントとなっています。バレンタインということで、やはりハート型のお猪口がよく売れます。博多織の巾着や久留米緋のハンカチとのセット販売を行うなど、他産地との連携にも取り組んでいます。また、過去には読者モデルの西本早希さんやJALとのコラボなど、産地として様々な取組みに挑戦しています。今年は福岡で人気の花屋さんとのコラボし、壁掛け花瓶の新商品開発を行う予定です。

Q.裕太さんが家業を継ぐことになったきっかけは？

(裕太さん) 大学時代の友人の影響で絵を書き始め、ものを作ることで得られる楽しさに改めて気付かされたこと、収入面よりも時間に余裕がある生活に魅力を感じたため、実家に帰り家業を継ぐことにしました。

(享一さん) もともと家業を継いでもらうことは考えておらず、横浜国立大学に入学後は

就職するように助言していました。戻ってきたときは嬉しい反面、心配な気持ちもありましたね。最近は、店内も息子の作品が多くなってきました。



Q.作品のテーマやインスピレーションが湧く瞬間などを教えてください。

(享一さん) 近年は「流れ」「炎」「台風」などをテーマに作品を作っています。

(裕太さん) 時代や文化が変わっても、良いと思われるような普遍的なものを作りたいです。インスピレーションに関しては他産地を訪問した際や、音楽を聞いているときなど、どんなシチュエーションでもありますね。

Q.庚申窯では陶芸体験もしているのですか？

(享一さん) 3,000円で体験できます。最近は若いお客様も来てくれます。お客様から店内の「あの商品が作りたい」と言われて、私が同じ商品を代わりに作ることもあります(笑)。でもやはりぜひ自分の手で体験していただきたいですね。

Q.最近の取り組みを教えてください。

(享一さん) 上野焼の魅力を知ってもらいたいとの思いで、自分の器に手料理を盛りつけて「本日の父料理」としてSNS上にアップしています。アップするのは娘ですが(笑)

(裕太さん) 福智町の事業の一環で、東京のレストランのシェフとのネットワークを構築することができ、その後はレストラン等から個別にお声がけをいただく機会が増えました。販売に関しては、2020年にオンラインショップを立ち上げ、遠方の方にも情報提供・販売できるようにしています。SNS等も活用し、固定ファンも増えてきました。庚申窯ではオーダーメイドの注文も受け付けています。



「本日の父料理」より

profile

窯元名

庚申窯

場所

福岡県田川郡福智町上野 1937

電話

0947-28-2947

休日

不定休

営業時間

10:00~17:00

Web サイト

<https://aganoyaki.net/>



Q.今後の展開は？

(享一さん) 上野焼の知名度がまだ低く、ブランディングが課題です。web等も活用しながら、上野焼をまずは知っていただき、新しいお客さん呼び込みたいです。また、個人的には、もっと薪窯を使った作品を作っていききたいですね。

(裕太さん) 新しい釉薬の表現などにも挑戦してみたいと思っていますが、基本的には何か特別な事に取り組むというよりは、「今のまま」が良いかなと思っています。



庚申窯の薪窯



壁に張られた釉薬のサンプル

Q.上野焼、福智町の魅力を教えてください。

(享一さん) 上野焼は昔からの型や緑の釉薬なども残しつつ、新しいものにも挑戦しており、バリエーションの豊富さが魅力だと思います。

歴史あるお寺や、福智山、白糸の滝、ほうじょう温泉ふじ湯の里などは福智町の観光スポットです。静かでゆっくりできる場所は魅力だと思います。

(裕太さん) 上野焼の魅力は「緑青流し」という釉薬に集約されていると思います。緑青流しは器の上部にかけた緑色の釉薬が、焼成中に陶肌を自然に流れた景色を良しとしています。

人の手を加えず、自然に出来上がるものに価値を見出すのは、日本文化の豊かな精神性であり、価値観を固定しすぎないところに上野焼の魅力があると思います。



緑青流し

福智町の名前の由来となっている福智山ですが、福智町はこの山の南側にありまして、陽が良く当たるので植生や風の通りが快活で、自然の朗らかな雰囲気が好きですね。

自然豊かな環境で、お二人が自由に、純粹にものづくりを楽しんでいらっしゃる様子がとても印象的でした。親子で作風は異なるとはいえ、たしかに技術と自由な発想はしっかりと受け継がれているのを感じました。また、家族でありながら、互いに干渉せず、陶芸家同士としての信頼関係が伝わってきて、とても温かい気持ちになりました。